
戦う者達 ~ 樹海に潜む死神 ~ from モンスターハンター

黒鬼風斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦う者達　　＼樹海に潜む死神＼　　　　f r o m　　モンスターハンター

【Nコード】

N 7 4 9 6 M

【作者名】

・黒鬼風斗

【あらすじ】

未探索地——樹海。そこに纏わる伝説は、近くの村人が代々受け継がれてきたもの。樹海には“死神”が存在する。命惜しくば近付く事なかれ——。しかし、ハンター達は果敢にも樹海へと足を踏み入れていく。己の力に絶対的な自信を持つ者、珍しい鉱石や動植物の採取のみを目的とする者——…生きて帰った者は数少ない。果たして、“死神”を討ち取るハンターは現れるのだろうか。

プロローグ（前書き）

自身モンハン小説第三弾です。が、この作品は未完のため、途中から更新が遅くなります。

この作品を読む前に、「玄人の俺と素人の私」「トライアングラー」を読んでおくとより楽しんで読めるかも！です。

ブローグ

それは、疾風の如き速さで忍び寄り。

それは、雷鳴のような雄叫びを上げながら。

それは、たった一撃で確実に獲物の致命傷を捉え。

それは、獲物の目には残像でしか捉えられない。

それは、黒き姿。

それは、真紅の瞳。

それは――……まるで死神の化身。

“奴”が潜む樹海へ、決して足を踏み入れる事なかれ。

命惜しくば、決して近寄る事なかれ。

死を恐れぬ不屈き者よ、決して目を閉じる事なかれ。

死を恐れぬ不屈き者よ、決して耳を塞ぐ事なかれ。

目を見開き、耳を澄ませ、己が命を狩り取る死神を感じよ。

決して忘れる事なかれ。

死は、いつでも己のすぐ近くに潜んでいる事を――。

×
×
×

「……何だ？ その頭の悪い奴が考えたような詩は」

陽の光が樹海に生い茂る木々の葉によって木漏れ日となり、空を見上げれば逆光となった葉が色を失ってモノクロに映る。遙か遠くにある筈の空、そして太陽もこうして見ると少しだけ近く感じる事が出来る。手を伸ばせば掴めるのではないかと、ジン「ジュルグは徐に降り注ぐ木漏れ日に向かって手を伸ばしながら、隣で彼と同じように巨木に凭れ掛かって座っているアルモの話した詩に向けて言った。

アルモは彼の言葉を聞き、怒ったように頬をぶくぶくと膨らませる。

「私が考えたんじゃないもん！」

「そりゃそうだ。お前にはそんな詩なんて洒落たモン、作れる訳がねえ」

「あゝ、ひつどゝい！」

アルモは言葉遣いから年相応の少女かと思われがちで実際に見た目もまだ少女なのだが、実際には23歳と十分な大人の女性である。だからと言って、近い年齢——25歳であるジンの目には恋愛の対象と考えるような部分が一切なかった。一言で言う子供体形である彼女だが、“狩り”の腕前だけはジンも認めている。普通の少女が双剣を手に踊る姿は、他人から見れば危なっかしい印象がある。だがしかし、彼女の舞は凄く美しいのだ。彼女がステップを踏む度に獲物から飛び散る鮮血——迸るそれを一切浴びる事のない程の無駄のない踊り——……共に狩りに行き、その踊りを見た者は誰でも魅入られる。そう、それはジンも例外ではなかった。

ジンが初めてアルモの舞いに魅入られたのは一年前、狩りの途中で偶然出会った時だった。フルフルを討伐するクエスト、ジンは一人で狩りに出掛けていた。弓を武器としている彼にとって、フルフルは近付かれさえしなければ比較的楽に倒せる相手だった。しかし、

フルフルと対峙中に不運にもランゴスタの毒に見舞われてしまい、
絶体絶命だった彼を偶然通り掛かったアルモにより救われたのだ。
初めて見た彼女の舞いは、今でも彼の脳裏に深く焼きついて離れな
かった。

それ以来、ジンとアルモは度々チームを組んでクエストを受注す
るようになり、そして今もこうして樹海の調査へとやって来ていた
のだ。まだまだ足を踏み込んだ者が少ない上、どんなモンスターが
生息しているかでさえはつきりしていない部分が多く、彼らは今回、
どんな動植物があるのか、どんな鉱石が眠っているのかを調査しに
来ていた。勿論、巨大モンスターに遭遇した時の為に狩りの準備は
万端に整ってある。ジンは岩竜バサルモスの甲殻やマカライト鉱石
から作られたくバサルシリーズを装備し、武器は雌火竜リオレイ
アの甲殻などから作られた弓、くクイーンプラスターを背に背負
っている。一方のアルモはババコンガの素材などから作られた、胸
元が大きく開いたくコンガシリーズ、そして同じくババコンガの
素材から作られたくピンクボンボンを背に背負っている。

今回の目的はただの調査……武器を使う事がなければいいんだが
なあ――。

ジンはカチャリと防具を揺らすと、スツと立ち上がった。笑いな
がら、座っているアルモを見下ろしながら言う。

「死神……ねえ。生きてる内に神様に会えるんなら、それも悪く
ねえかも知れねえな」

「んもつ、そんな風に言わないでよ！ この樹海に“何か”がいる
事は確かなんだからね！」

「……分かってる、注意は怠らないつもりだ。ところで、“あいつ
ら”遅いな」

“ あいつら ”——この先の洞窟の中で採掘をしている筈のメイスとガイの事だ。彼らは4人でこの樹海を訪れ、ジンとアルモは動植物の調査、メイスとガイは鉱石の調査という事で二手に分かれていたのだ。そして待ち合わせしているこの巨木の下で待つ事30分——未だに彼らは帰って来ない。ジンはハァと溜息を吐き、未だに座ったままのアルモに向けて言った。

「さて問題。あいつらが戻って来ない理由は何だと思う？」

「えゝ、当てたら何かくれる？」

アルモはジンを見上げ、その彼に両手を差し出して『ちよーだい』と首を傾げてみせる。愛らしい仕草には違いないのだが、ジンにとつてアルモは妹のような存在……それ以前に彼女を女として見ていない彼は特に何も感じなかった。ジンがアルモに対して何かを感じる時、胸の鼓動が高鳴る時、それは彼女が舞うその瞬間だけ。

ジンはアルモから視線を外し、彼らがいる筈の洞窟に目をやった。二人が洞窟から出るような気配は皆無だった。中からは特に巨大なモンスターが暴れているような轟音も聞こえない。特に心配する必要もない筈なのだが——ジンの胸には、何かモヤモヤが渦巻いていた。

「いいから答えて見ろ」

「んゝと……珍しい鉱石が手に入ったから独り占め！」

「まあ……アリだな。他には？」

「樹海が怖くなっちゃったから、先に帰っちゃったとか？」

「それはない。ここから出るには俺の持つ地図が必要だ。あいつらが来た道をわざわざ覚えてる筈がねえ」

「えゝと、じゃあゝ」

まあ、やっぱ、様子を見に行くかねえか――。

この調子でアルモとやりとりをしても時間の無駄だと悟ったジンは、その場から立ち去るように突然彼女に背を向けると、そのまま洞窟に向かって歩き出した。それを追うようにアルモもすぐに立ち上がり、彼に追いついては後ろにぴったりと並んで歩き始めた。他人からすれば、そうやって歩く二人は兄妹か恋人同士に見えるのかも知れない。しかし、彼はただの仲間に過ぎない。クエスト完了という同じ目的を目標とする、互いの大事なパートナーに過ぎないのだ。

「クスッ」

「何だよ、突然」

アルモが突然笑い、ジンが戸惑う。

「ううん、なんでも！」

「……良く分からない奴だな」

ジンは気付かなかったが、アルモはまるで誰かと握手でもするかのように何も無い空間に手を差し出していた。それを歩調に併せて小さく上に振ったり下に振ったりしている。彼女のしている事は、彼女やジンの姿を見るだけでは到底理解出来ないだろう。

ジンとアルモが陽の光に浴び、地面に出来る黒い、二つの影。

その影の中で、二人は互いの手を取って歩いていた。

それはまるで、兄が妹の手を引いて歩くような影だった。

×
×
×

樹海の中央付近に位置する洞窟は、洞窟と呼ぶよりは空洞と呼べる程の大きな広さがある。その中央には陽の光が差し込み、冷たい地面にそこだけ綺麗な花を咲かせている。壁の凹凸にはところどころ淡い青色や緑色をした鉱石がちよこんと顔を覗かせていた。

そこへ足を踏み入れた瞬間、漂う血臭にジンとアルモは異変を感じていた。血生臭いその臭いは、何かの生き物がここで怪我を負ったという証明でもあった。彼の脳裏に咄嗟に過ぎるのはメイスとガ伊の顔だ。しかし、その場から360度見渡しても、アルモ以外に人の姿などなかった。二人が見つける事が出来たのは、地面に蠢く数匹の巨大な甲虫——カンタロス、そしてメイスとガ伊の腰に掛けていたポーチとピッケルだけだった。

ガイはゆっくりと地面を踏み締めながら彼らの荷物の元へ歩き、そしてピッケルを手を持った。一度も使われた形跡のない、新品のピッケルだった。それは彼らが鉱石を掘る作業に掛かっていない事を意味していた。

冷や汗がジンの頬を伝う。アルモはただ両手で鼻と口元を覆い、その光景を啞然と眺めていた。

「……何が起こったんだ」

ジンがポツリと呟くも、それに答えられる人間はその場にはいなかった。

「あいつらはどこへ消えたんだ……っ!？」

自分が激しく動揺している事に、ジン自身は気付いていた。だが、彼の胸の底から無限に湧き上がる不安と恐怖、そして絶望が彼の思考力を皆無にし、鳥肌を立たせる。嫌な悪寒が背筋を走り、ゾクリと身体が震える。

二度目の言葉に対しても、当然の如く誰からの返答はなかった。その返答の代わりに、別の声がジンの耳に届いた。それは、後ろにいたアルモの声だった。しかしそれは、決してその場を和ませたり、ジンを奮い立たせたりするようなものでは決してなく、逆に不安に駆られるようなものだった。

「……それは、疾風の如き速さで忍び寄り。」

ドクン、とジンの心臓が高鳴る。つい先程も耳にした言葉だ。

「『それは、雷鳴のような雄叫びを上げながら』……」
「……やめろ」

だがそれでも、アルモはジンの言葉が聞こえなかったかのように、その次を詠う。

「『それは、たった一撃で確実に』——」
「やめろつつってんだろおっ!!!」

ジンの大きな叫びがその空洞に反響し、エコーのように何度も何度も自分の声が聞こえる。アルモはそれに驚き、『ひっ』と声を上

げて詠うのを止めた。ジンはようやく後ろを振り返り、アルモの姿を見つめた。目に見えて分かる程彼女の身体は震えていた。目に、涙を浮かべながら。

「……落ち着け。まだあいつらに何かがあつたと決まった訳じゃねえだろ」

「で、ででで、でも……っ！　もしかしたらあの“詩”の通り、“死神”が——」

「死神なんざこの世に存在する訳ねえだろうが！！」

ジンの言葉にアルモは再び身を強張らせる。これ以上何かを言えば、大声で泣き出してしまいそうだ——彼はそう感じ、頭を掻きながらすかさずフォローを入れる。

「不安なのは……怖いのは俺もなんだよ……っ！　けどな、ハンターである以上、どんな状況でも冷静に行動できる必要がある。お前にはそれが出来る。そして……俺にも、な」

カコー……ン。

突然だった。ジンの背後から、何か重い物が地面に落ちたような音がして、彼は慌てて振り返り、それを確認した。リオレイアの素材から作られた女性用の兜が——夥しい量の血が付着したメイスの兜が、コロンと転がっていた。……それが何を意味するのか、二人はその一瞬で悟った。

上に、何かいる——ジンはそう思ったが、それよりも先に一旦この場を離れる事を選択した。正直に言つて、彼はその何かを見るのが怖かったのだ。一度目を合わせてしまえばやられる、そんな衝動に駆られてしまったのだ。

「おい、アルモ——……っ!？」

ドォンッ!!

ジンが叫び、アルモの方へ振り返ろうとした瞬間、何か巨大な生物が飛び降りたかのような轟音と地震のような衝撃が彼を襲った。彼はそれでも先にアルモの方へと振り返り、彼女の姿を確認しようとした。だが、彼が目にする事が出来たのは彼女のピンク色の装備ではなく、何か目の前を高速で横切っていた巨大な大きな黒い影だけだった。いや、それともう一つ——彼の目には、自分を睨み付ける、真紅の一对の瞳が一瞬だけ写った。

「アルモっ!？」

辺りを見回すも、もうそこには高速移動する黒い影も、真紅の瞳も、<コンガシリーズ>を身に纏った彼女の姿さえ見つける事が出来なかった。

『それは、真紅の瞳』——アルモが口にしていた詩が彼の脳裏を過ぎる。間違いない、今この場にいる何かが、その詩で言う“死神”なのだ。

「アルモ!! どこだぁぁっ!!」

彼の叫びだけが空しく響き渡る。しかし、そのエコーが収まった頃に、頭上から僅かな声が彼の耳に届いた。女の……アルモの声だった。

「……ジン……」
「な……にい……っ!？」

上を見上げたジンは思わず声を上げてしまった。そして、彼は見てしまった。……“死神”の姿を。

遙か上——この空洞の天井に張り付くような形で、“死神”はいた。大きな牙がその場からでもよく見えるその口に、アルモの腹部を銜えて。その大口に銜えられぐったりしながらも、彼女の目はしっかりとジンを見ていた。だがその目には既に生氣は感じ取れなかった。

アルモが口を動かす。『ニ・ゲ・テ』と。実際にはそれを声に出していたのかも知れないが、遙か下のジンの耳に届く事はなかった。ジンは彼女を何とか助け出そうと一歩前に踏み出した、その瞬間だった。

メキ……バキバキバキッ！

アルモは断末魔さえ上げる事はなかった。“死神”の大口によって鎧ごと噛み砕かれたアルモの背中では奇妙な角度に曲がり、ピクピクと痙攣していた。その痙攣が止む前に、“死神”はその口を大きく広げ、

「グオオオオオオオオッ！！！」

と鼓膜が破れるかと思うくらいの咆哮を上げた。途端、彼女の身体は支えを失い、重力に引かれるままに地面に激突し……そしてもう、動く事はなかった。

ジンの目には怒りに満ちていた。齒を食い縛りながら、遙か頭上から自分を見下ろす真紅の瞳を睨み返す。だが、たった一人じゃ勝機はないという事も……彼は悟っていた。

彼の行動に選択肢はなかった。そして、その行動に一切の迷いもなかった。

「……っ!!」

奥歯をギリリと音がなるくらいに噛み締めながら、ジンは腰に提げたポーチから一つの玉——閃光玉を取り出し、間髪空けずにその線を引き抜き、頭上の“死神”に向かって投げつけた。投げつけるのと同時に、彼は一瞬で踵を返すと、空洞の外へ向かって全速力で走り出した。走り出した直後、背後からの光とは言え眩しい光が彼の視界を一瞬奪う。閃光玉が炸裂したのだ。……足音や唸り声が一切近付いて来ないところから、恐らく閃光玉の光によって“死神”は目を潰されたのだろう。

「畜生……っ、畜生畜生畜生畜生畜生っ!!!!」

ジンは目に涙を浮かべながら、空洞を出てからも走り続けていた。仲間を失った辛さ、そして逃げる事しか出来なかった自分の不甲斐なさ。その涙を占めている物の多くはその二つだろう。

やがてベースキャンプまで戻った彼はようやく立ち止まり、両手を膝に当ててぐったりしながら息を整える。うつむいた彼の顔から零れる液体——汗、そして涙。彼の喉から嗚咽が漏れ、それはそよ風に乗って、静かに辺りへと運ばれていく。

「ちつつつくしよおおおおおおおおおおおっ!!!!」

彼はただ、行き場のない怒りに身を震わせていた。

戦う者達　　く樹海に潜む死神く
プロローグ　完

第一話 「蒼き甲冑の玄人」

白銀の世界。ポツケ村より北に広がるフラヒヤ山脈は今日も良い天気だが、高く聳える山々に降り注いだ一面の雪は一向に溶ける気配はなく、そこに生息する動物や訪れる人々の足跡でさえも一晩も掛からずに消し去ってしまうようなそんな極寒の地に、今日もポツケ村からやって来た獲物を求めるハンターは数知れない。ある者は何人かチームを組み、そしてある者はたった一人でこの山に挑む。そして“彼”は後者で、たった一人で獲物を求めてこのフラヒヤ山脈に足を踏み入れていた。

ポツケ村で生まれ育った“彼”にとって、フラヒヤ山脈は自らを鍛える地であると共に憩いの地でもあった。凍るような寒さでさえも、“彼”にとっては心地良く感じていた。白い息が口から出るのは、自分が呼吸をしている証。一步、そしてまた一步足を踏み出す度に雪の上に出来る足跡、それはここに自分が歩いたという証。

自分が今生きているという事を実感させてくれる場所……いつ来ても最高だ——“彼”は山の頂上に立ち、そこから見える景色を眺めていた。風に流れる雲も、さんと輝く太陽も、そこからでは地上で見るよりもはつきり見る事が出来る。高い場所から見る景色というのは、どれもとても新鮮でとても美しい。この大いなる自然の前には、人間もモンスターもちっぽけな存在であると思えてくる。そして人間もモンスターも、自然の一部であるという事を“彼”は分かっていた。

やがて“彼”は外していた兜——<ギザミヘルム>をゆつくりと自分の頭へと戻すと、踵を返して来た道を戻り始めた。“彼”がこのフラヒヤ山脈に来たのは景色を見る為でも、自分を見つめ直す為

でもない。ただ、己に課された任務を遂行する為だった。

「ドスファンゴ頭……か。慣れない武器とは言え、どうせならフルフルの相手でもしたいものだ」

ドスファンゴ頭の討伐——それが“彼”に与えられた今回の任務だった。ポツケ村の村長に紹介されたクエストには違いはないのだが、“彼”にはクエストを選ぶという選択肢を与えられていなかった。“彼”の状態を考えれば村長の判断は妥当に違いないのだが、“彼”は自分が過小評価されている気がしてならなかった。

“彼”は先日、リオレウスを討伐した際に右肩を負傷し、最も好んで使っていた大剣を使えない状態にある。そして今回、これが負傷してから初めて受けるクエストだった。ただ最も得意である武器を使えないだけで、ドスファンゴなどという初心者級のハンターが与えられるようなクエストしか与えられなかったのだ。

少しばかり煩わしい表情をした“彼”が、背中の双剣<デュアルトマホーク>の柄をさすりながら、小さく呟く。

「……そろそろジンが樹海から帰って来る頃合。さつさと片付けるとするか」

“彼”——アルトア「イゼンリイは不敵に笑った。

戦う者達　　く樹海に潜む死神く

第一話　「蒼き甲冑の玄人」

雪道は滑り易い。グリーヴやレギンスといったハンター用脚部防具にはどんな足場にも対応出来るような特殊な工夫がしてあるのだが、それでも氷のように変化した雪の斜面はどんな熟練のハンターでも注意しないと見っとも無い姿を晒してしまう事になる。そういう意味では、ポツケ村出身以外の初心者ハンターにとっては忌み嫌われてしまう場所なのかも知れない。つい先日他の街からポツケ村に派遣されて来た一人のハンターがとあるモンスターに襲われ、足を滑らせてしまい崖から落ちるといふ事故があつた。雪山で最初に慣れなければならぬのは、しっかりと歩き、走れるようになる事だろう。

40度近い傾斜の斜面をスーツと滑るアルトアはまるでスケートをしているかのようだ。バランスだけ崩さないように注意しながら斜面を滑り、やがて平面な地面に辿り着いたところで右足を大きく前へ踏み出し、勢い良く更に前進しようとする自分の身体にブレーキを掛ける。ザクツ、と一際大きな音と共に踏み出した右足の雪が

大きく抉れ、茶色い地面が久しぶりに顔を覗かせた。

自分の身体が完全に静止した事を確認すると、彼は再び前へと、獲物を求めて歩き出した。

彼はこのフラヒヤ山脈でのドスファンゴとの戦闘は何度も経験していた。だからこそ、獲物の行動パターンや生息地も全て熟知していた。他のモンスターにも言える事ではあるが、ファンゴ類は特に縄張意識が強く、起きている時間の大半を自分の縄張を見張る為に費やしている程だ。そして群れに害を与えるような者がそこにいれば排除しようとするのだ。主にそれは人間のハンターである。

ファンゴ同士やファンゴと他のモンスターが争っている様子など、アルトアは長年ハンターをやっているが見た事がなかった。このフラヒヤ山脈をはじめ、ハンターがしばしば出入りするようになった場所というのはモンスターのそういう意識が薄れているかもしれない。

彼らは人間のハンターを天敵と考えているのかも知れない。そして、その天敵から身を守る為、モンスターの種族関係無しに人間を敵視しているのかも知れない。

そうだとすれば、人間もモンスターも大差ないのかも知れんない。

アルトアはフツ、と笑った。人間もモンスターという脅威に対し、人種など関係なしに協力している。それが天災とも言われる“古の龍”が出没した場合は特にそうである。なりふり構ってられない状況というのは、人間にもモンスターにもあるようだ。

こんなどうでも良い事を考えている時のアルトアは普段見る事はない。それは今の彼の状況が、余裕に満ち溢れている証だった。慣れた場所、慣れた敵。“油断大敵”という言葉を知っている彼も、

時折こんな風にどうでも良い事を考え、『くだらない』と表情に出してしまう。

銀世界を更に暫く進むと、アルトアはふと立ち止まった。彼の目の前には、少々奇妙な光景が広がっていた。

それは、ハンターには違いない。銀色の鎧は間違はなくマカライト鉱石から作られたくハイメタシリーズ。それを身に纏い、長い刀身を持つ“太刀”と呼ばれる剣を腰に提げている。ただ、その身長が余りにも低すぎるのだ。5、6歳の子供くらいの身長のハンターが、アルトアの獲物であるドスファンゴと対峙しようとしているところだった。独特な形をした兜でその素顔を拝む事は出来なかったが、身長から判断するとそれが子供であるという考えしか思いつかない。それに対し腰の太刀は普通の人間が使用する大きさの物で、明らかに身体とは不釣り合いだった。

茶色の体毛に全身を覆われたドスファンゴが自慢の牙を上下に荒く揺らしながら、唸り声を上げているのが聞こえる。その目には当然、その小さなハンターが捉えられていた。

自身に降り掛かる火の粉を振り払っているだけなのかも知れんが、“そいつ”は俺の獲物だぞ――。

アルトアは背に背負っていた双剣<デュアルトマホーク>を両手に持ち、小さなハンターとドスファンゴとの間に割って入るべく雪面を駆け抜ける。途端、昨夜にでも降り注いでいた白い新雪がまるで砂埃のように彼の後に舞い上がる。

だが、アルトアが割って入る前に戦闘は始まってしまった。ドスファンゴが低い唸り声を上げながら地面を蹴り、小さなハンターに向かって突進する。ともに正面からそれを喰らっては、<ハイメタシリーズ>でさえも耐え切る事は難しいだろう。だがその小さなハンターは、太刀の柄に手を掛けて構えたまま、身動きもしなかつ

た。

“ あいつ ” の突進に正面から立ち向かう気か——アルトアはその小さなハンターが何を考えているのか分からなかった。大剣やランス、片手剣の類ならば攻守共に優れている為、巨体の突進でさえも何とか耐え切る事は可能だ。だがしかし、双剣や太刀などは攻撃を主体とした武器であり、防御には不向きである事はハンターであれば誰もが知っている事実だ。アルトア自身、今の武器でドスファンゴの突進を正面から立ち向かうなど自殺行為に等しいと思っていた。

そして、アルトアは見た。ドスファンゴの大きな牙が小さなハンターに当たる寸前、それが動いたのを。

ドスファンゴが何事もなかったかのように小さなハンターがいた場所を通り過ぎる。やがて雪煙を上げて静止したドスファンゴが、何も衝突しなかった事を不思議に思ったのか、慌てたように振り返った。だが、ドスファンゴが慌てるような動作を見せたのはそれからだった。奇声を上げながらまるで子供が駄々を捏ねるようにその巨体をジタバタさせる。そこにある筈の物が、なかったのだ。

ドスファンゴの突進を紙一重で回避した小さなハンターが二、三歩歩き、そこに落ちた二本のドスファンゴの大きな牙を拾い上げる。その時には既に、一瞬で抜かれた太刀は元の鞘の中に収められ、何事もなかったかのように腰に提げられていた。

「……ほう」

アルトアはその見事な業に思わず嘆息を漏らした。走っていた足を一旦止め、ゆっくりとその小さなハンターに向かって歩き出す。ドスファンゴにはもう戦う気力がないという事は明らかだった。彼が小さなハンターの元へ近付いた時には、ドスファンゴはジタバタを止めて自分の巣へと向かって早足で去っていくところだった。

双剣を背に戻した後、彼はその小さなハンターに向かい口を開いた。

「さっきのは“イアイヌキ”という業か？　もしかして“シキ”の……いや、突然すまない。さっきの業があまりにも見事だったのだな」

「……普通のハンターには何が起こったかすら分らないんだけどね。あんたも、普通のハンターじゃなさそうだね」
「それはどうも」

案の定、子供特有の高い声だった。ただ、少年か少女かは、アルトアにはその声から判断出来なかった。改めて傍に寄って見ると、本当に子供のような身長だと彼は思った。自分の腰くらいしかない。そんな子供が凄腕とは言え、何故ハンターの試験に合格出来たのか不思議でならなかった。

「もしかしてさっきのはあんたの獲物だったのかい？　なら、さっさと追いかければ？」

「いや、構わん。戦意を喪失した奴を倒したところで何の意味もない。……村長には適当に言っておくさ」

「ふうん……？　まあいいや、オイラはこいつだけ欲しかったんだ」

そう言ってさっきまでドスファンゴの物だった大きな牙を、手を挙げて高く掲げる。しかしそれでも、アルトアの目の高さまで届く事はなく、せいぜい胸の高さだった。

不思議な奴だ——アルトアはそう思ったが、その小さなハンターについてこれ以上詮索する事を止めた。多くの人間がコンプレックスを持っている。そして“彼”の場合、その身長にコンプレックスを持っている可能性が高いと思ったからだ。兜の下はもしかしたら髭面の年寄りかも知れない。もしかしたら本当に子供かも知れない。

……だがもう、彼はその事を考えるのは止めた。

「さて、と」

小さなハンターは呟き、その場から歩き去ろうとアルトアに背を向ける。一歩進んだところで一度立ち止まり、背を向けたまま口を開く。

「オイラは村に帰るけど、あんたはどうする？」

「俺も帰るとする。一緒に帰るか」

「いいよ。じゃあ帰ろうか、アルトアさん。オイラはロジャーって言っんだ」

小さなハンター——ロジャーがアルトアに向かって振り返る。その兜のせいで、表情は一切分らない。

「……ロジャー、何故俺の名を？」

「そりゃ、ポツケ村じゃ有名だからさ。さ、行こう」

ロジャーが再びアルトアに背を向ける。その拍子に、＜ハイメタメイル＞から何かが出てきた。“それ”は決して地面に落ちる事はなく、＜ハイメタメイル＞に繋がっているかのようにだった。

……ああ、なるほどな——それを見た瞬間、アルトアはロジャーが何故極端に身長が低いのか、その理由を悟った。＜ハイメタシリズ＞で全身を隠している理由、それは――。

「……村長や村の連中には黙っててやる」

「何が？」

「腰の“それ”、しまっておけ」

ロジャーは手を腰に当て、飛び出している物が何か確認した瞬間、『わわっ』と声を上げながら大慌てで“それ”を鎧の中へと戻した。そして再びアルトアに向き直る。兜の間からかるうじて見えるその目は怒りに満ちているようだった。

「……見たね……………っ！!?」

「そう殺気立つな。黙っててやると言っただろう」

「嘘だ！ そんなの信用出来ない!!」

「ならどうする？ 口封じでもするか？ 言っておくが、ただで殺されるつもりはないぞ……………」

「……………っ!!」

アルトアが凄腕のハンターであるという事を知っていたロジャーは、如何に自分が強いとは言え、まともに戦ってはどうか分らない。そしてハンターが人に剣を向ける事もご法度である事も知っていた。太刀の柄に伸びかけた手を、彼はゆっくりと元へ戻しながら言う。

「……信用するよ。どうせオイラは流れ者。いつまでもポケット村に居座るつもりもないし」

「そうか——…っ!」

その瞬間、アルトアは全身に鳥肌が立つような寒気を覚えた。何度も経験した事があるそれは、“奴”が近くから自分を睨んでいる証拠だった。

面倒な奴が来たな。さつさと村に帰りたいのだが——アルトアはチツと舌打ちし、双剣に手を伸ばした。同じく、ロジャーも太刀の柄に手を伸ばしている。

「……いるね」

「分かるか」

「それでもハンターだからね」

ドシュー……ン、と轟音を立てて彼らの前方に降り立った巨体の姿は、生じた雪煙によって肉眼では確認出来ない。だが、“奴”は確かにそこにいて、彼らを睨んでいた。

「逃げるのも一つの手だと思うよ」

「そうしたい気持ちも分かるが……見つけてしまった以上、野放しにする訳にはいかんだろう」

「まあ、初心者ハンターの相手にはならないからね」

やがて風が吹き、雪煙が晴れる。

“奴”——“轟竜”ティガレックスの雄叫びが、フラヒヤ山脈に響き渡った。

T o B e N e x t …

第一話 「蒼き甲冑の玄人」(後書き)

「蒼き甲冑の玄人」、ギザミシリーズに身を纏った「玄人の俺と素人の私」の主人公、アルトア・イゼンリイ再登場です。

こういう風に物語をつながせていく手法が好きだったります。

名前のモチーフは……アレですね、リボルビングなんちゃらを放つアレですw

第二話 「その働き、電光石火の如し」

ティガレックス——橙色の甲殻で全身を覆い、鋭い牙と爪、そして持ち前の素早さを活かした突進で標的を追い詰める事を得意とする“飛竜種”。近年より主にフラヒヤ山脈で目撃される事が多くなり、その獰猛さから多くのハンターがティガレックスと遭遇、戦う事を恐れている。事実、奴の毒牙に掛かって死亡したハンターや商人は数知れない。

低い唸り声を上げながら、ティガレックスは前方の標的——アルトアとロジャーを睨み付ける。そして彼らもそれに動じる事無く、アルトアは双剣<デュアルトマホーク>を構え、ロジャーは鞘に収められた太刀の柄をしっかりと握り締め、低い背丈を更に低く見えるような姿勢で構えていた。

アルトアがふとティガレックスの目から視線を逸らし、狩場の状況を確認する。ティガレックスの後方には崖、そして彼らの後方には氷の絶壁。しかしそれぞれ距離があり、モンスターと対峙するには十分な広さの場所だと言える。

使えるな——。

アルトアは後方の氷の絶壁に目を付けた。そして視線をティガレックスへと戻すと、ロジャーに向かって口を開いた。

「後ろの壁を使う。……意味は分かるな？」

『なるほどね』と、一瞬だけ後方に目をやったロジャーが鼻で笑う。

「りょーかい。フォローするよ」

「では……行くぞ」

呟いた瞬間、彼は突然踵を返して後方の壁に向かって走り出す。それとほぼ同時にティガレックスにも動きがあった。両翼を大きく後ろへ移動させ、力を溜めているような仕草を見せる。奴の仕掛けようとしている攻撃を察したロジャーがスツと先程までアルトアが立っていた場所へ移動し、そこで改めて太刀の柄に手を伸ばして構える。

やがて、ティガレックスの両翼が地面を抉りながら前方へ押し出された。とてつもない力に抉られた地面は雪に覆われた大きな塊となり、三つに分散して三方向へと飛んでいく。中央の一つの塊はそのまま直進すればロジャーやアルトアに直撃するコースだ。だがしかし、ロジャーはそれを許さない。その為にわざわざ立ち位置を変えたのだから。

大地の塊がロジャーへと迫る。彼はそれに動じる事などなかった。勢い良く飛んできた大地の塊、それが太刀の攻撃範囲内に入った瞬間、彼は鞘から太刀を引き抜いた。

一閃——音もなく放たれた太刀の一振り。それは空振りなどではなく、ロジャーに直撃かと思われた大地の塊が縦に真っ二つとなり、一閃によって軌道を変えられたそれらは彼に当たる事なく地面に激突した。

「動きを封じるのは任せたからね。……まあ、トドメは頂くけど」

ロジャーの太刀は、いつの間にか再び鞘の中へと収められていた。

戦う者達　　樹海に潜む死神　　
「その働き、電光石火の如し」

攻撃を回避されたティガレックスが一度小さく咆哮し、そして再びアルトアとロジャーを睨み付ける。アルトアの思考を読んでいたロジャーは自分が何をすべきか簡単に判断する事が出来た。今彼がすべき事、それは――逃げる事。

ロジャーは先程のアルトアと同様に踵を返し、彼を追うような形でティガレックスに背を向け走り出した。太刀の柄に手を伸ばしていつでも反撃出来るようにではなく、必死に全速力で駆けていた。勿論、ティガレックスはそれを追うべき、四本の足を駆使して二人に向かって走り出す。それは人間の走る速さとは比較にならない程速く、ただ一直線に逃げていてはすぐに捕まってしまう、その巨体の下敷きになるかその大きな牙で噛み碎かれるかどうかである。そしてロジャーは、そのどちらとも選ばなかった。

やがてティガレックスの巨体がロジャーの背後に迫る。それを殺

気と轟音、影から確認した彼はすぐに90度身体の角度を変え、地面を力一杯蹴ってそちらへと飛び込んだ。重い装備を背負っているのにも関わらず脚力は十分にあつたロジャーは、悠々とティガレックスの攻撃から回避する。だがそれでもティガレックスの足は止まらない。奴の目には既に次の標的——アルトアの姿を捉えていた。

雪の上へと飛び込んだロジャーが前転してすぐに立ち上がると、今度は太刀の柄をしっかり握り締めながらティガレックスの背後を追うような形で走り出す。

一方のアルトアはようやく氷の絶壁へと辿り着こうとしていた。走っていた足を止める事なく、右手のトマホークを振り翳し、そしてそれを壁に向かって力一杯投げ付ける。グルングルンと音を立てて回転したトマホークがやがてザクツ、という音と共に浅く壁に突き刺さる。氷で出来た壁は思いの他硬いようだった。だが、彼にはそんな事など関係なかった。

氷の壁よ、これでも耐えられるか——。

アルトアは走っている勢いをそのままに左足を大きく前へ踏み出し、それを軸足として廻し蹴りを放つ。勢い良く放たれたそれは外れる事なく浅く氷に突き刺さっているトマホークに直撃し、深く凍りの壁に突き刺さる事となった。そしてそれは、即興の“踏み台”となる。

アルトアはトマホークが氷に深々と突き刺さつたのを確認すると、左手に持っていたもう一本のトマホークを右手に持ち替えながら背後を振り返った。案の定、ティガレックスの巨体がすぐそこまで迫っていた。

予想通りだった。こうも上手く事が運んだのはロジャーの協力があつてこそだろう。これだから相性の良い仲間とのチームプレイと

いうものは止められない。アルトアは笑みを浮かべながら、“その時”を待った。

まだだ、まだ――……。

もう少し――……。

今だ――……っ!!

ザッ、とアルトアは地面を蹴り、そして壁に突き刺さったトマホークの柄を踏み台としてそのまま真上に高く舞い上がった。その後、轟音と共に勢い余ったティガレックスがさっきまでアルトアがいた壁に激突し、大きく開けていた口から飛び出していた牙が氷に深々と突き刺さる。すぐに体勢を整えようとティガレックスがもがくが、一旦突き刺さってしまった牙がそう簡単に抜ける事はない。

右手のトマホークを高く振り被り、左手をその柄に添える。両手持ちとなると力が一本の剣に凝縮される事となり、通常の片手で斬り付けるよりも遙かに攻撃力が高い。更に加えて重力に引かれる落下速度も力として加わり、例えティガレックスであろうともそれで急所を当てる事が出来れば致命傷を与える事が出来るかもしれない。アルトアの狙いは、まさに真上から脳天に一撃食らわせてやる事だった。

喰らえ――アルトアは思いっきりティガレックスの脳天にトマホークを振り下ろす。骨が砕けるような鈍い音と共にトマホークがティガレックスの頭に突き刺さり、真っ赤な鮮血が地面の雪を赤色に染めていく。

「ギヤアアアアウツ!!!」

ティガレックスが咆哮を上げる。間近での轟音にアルトアは思わず握っていたトマホークを手放し、両手で両耳を塞いだ。その隙にティガレックスが四肢を、まるで人間が屈伸か腕立て伏せでもするかのように折り曲げ、遙か空を見上げた。

間違いない、逃げる気だ――アルトアはそう悟ったが、今からトマホークを拾って攻撃しても間に合わない。そう、アルトアは間に合わない。

「てりやつ!!」

ティガレックスの背後を付いていたロジャーが鞘から抜いた太刀を振り上げ、間髪空けずに振り下ろす。その一閃はたった一撃でティガレックスの尻尾を切断する事に成功したのだが、ティガレックスの行動が止まる事はなかった。大きく折れ曲がった四肢が元に戻った瞬間、そこにティガレックスの姿はなかった。遙か上空へ跳び上がったのだ。

チツとロジャーが舌打ちし、遙か上空を見上げる。高く飛び上がった巨体が、前足に付いた小さな翼で器用に風に乗り、どこかへ逃げ去っていくところだった。

チン、と太刀を鞘へと収めるロジャー。そしてアルトアもくデユアルトマホークを背に戻す。

「近くに降りてくれればトドメを差しに行くんだけどね」

「頭蓋骨を陥没させた手応えがあった。逃げたところで、長く生きてはいらねえだろう」

「って事は報酬はこの尻尾だけか……。あゝあ、何か勿体無いや」

ロジャーが地面に落ちたティガレックスの尻尾を軽くコンコンと二度、三度蹴る。そしてハアと長い嘆息を吐いた後、ポーチの中から剥ぎ取り用ナイフを取り出し、尻尾の甲殻を剥がし始めた。

「アルトアさんは要らないの？」

「余ったり、持ち切れなったりしたらもう」

「ふーん、じゃあアルトアさんの分、ないよ？」

「別に構わん」

ティガレックスの素材ならアルトアは間に合っていた。己を高める為、強力な武具を作る為、仲間との親睦を深める為——彼はティガレックス討伐の依頼が村に入っては優先的に受注していた。おかげでティガレックスの行動パターンはある程度熟知し、単独でも慎重に時間を掛けて戦えば勝てる程の自信があった。

そういえば、ジン達は村に着いただろうか——アルトアはふと思いついた。共にティガレックスなどと戦った戦友達——ジンをはじめ、アルモやメイス、ガイ達の事だ。今回は彼を除く四人が樹海の調査という事で発っていて、無事ならばそろそろポケ村に戻っている頃合だった。

「剥ぎ取りが終わったのなら村に戻るぞ。 “あいつ” より先に村に戻っていないと、五月蠅いからな」

尻尾から甲殻などを剥ぎ取ったロジャーが立ち上がり、アルトアに向き直る。

「 “あいつ” って？」

「——俺も興味あるな。誰が五月蠅いって？」

不意にアルトアとロジャーの横から聞き慣れた声がした。振り返

るとそこには、<バサルシリーズ>に身を纏ったガンナー——ジン
「ジュルグが立っていた。心成しか、その目は少し充血しているよ
うに見える。」

「帰って来ていたのか、ジン」

「ああ。ちよつと前に帰ったんだが、村長に聞けばお前がまだ雪山
から帰ってないって聞いたからよ、迎えに来てやった。ところで、
こっちのおチビさんは？」

「おチビさんとは失礼なっ！ オイラはロジャー、あんたこそいき
なり出て来て何なのさ！？」

「挨拶の類なら後にしろ。村に帰るぞ。樹海はどうだったか、帰り
道で聞かせてもらっぞ」

アルトアが樹海という単語を口にした瞬間、ジンの表情が一瞬で
変わった。目を伏せ、顔が若干青褪めている。

「ジン……どうした」

暫くして、ジンは来た道の方へ向き直り、ゆっくりとそして小さ
く呟いた。

「村に帰ったら………葬儀がある。メイスとガイと………アルモの、
な」

T o b e n e x t …

第三話 「素人の彼女と玄人の彼」

戦う者達 ー 樹海に潜む死神 ー 第三話

「あつついなあ……。火山ってなーんでこんなに暑いんだろ」

紅き溶岩があちこちで低くうねり、まるで訪問者を拒むかのように洞窟を高熱で保っているラティオ火山には数々の貴重な鉱石が眠っており、それを求めるハンターは数知れない。だが、鉱石の探索にはあらゆる危険が待ち受けている。この火山には獰猛なイーオスをはじめ、岩竜と呼ばれる“飛竜種”バサルモスや鎧竜と呼ばれるグラビモス、そして災厄を齎すと言われているガブラスの目撃情報が絶えない。間違っても単独でそれらのモンスターに遭遇してしまえば、訪問者の生命の危機は免れないだろう。

だがしかし、“彼女”は今日も単独で行動していた。腕に自信がある訳ではなく、『モンスターに遭遇しても逃げれば良い』という安易な考えの元、行動しているのだ。全身をびったり包み込んでいるのは水竜と呼ばれるガノトトスの鱗で作られたくガノスシリーズ>、そして背には甲虫種のカンタロスの素材で作られたくソニックボウ>が装着されている。それぞれの武具の特徴など、“彼女”は特に気にはしていなかった。手に入ったばかりの素材で作られた新作を試しにと装着しているだけだった。幸運な事にくガノスシリーズ>がこのような火山の過酷な環境にも対応しているが、“彼女”はそれすら知らない。

『暑い暑い』とぶつくさ呟きながら、“彼女”は額や頬から流れる汗を頻繁に拭う。ピッケル片手に一体どれくらい歩いただろうか、“彼女”の目的地は未だ見えない。ラティオ火山の最も深いところに絶好の採掘ポイントがあると村で聞いていた“彼女”は、通り道でいくつかの採掘ポイントを見つけてもただ真っ直ぐにそこだけを求め、歩き続けている。

マカライト鉱石や鉄鉱石などはあちこちから採掘する事が出来るが、紅蓮石と呼ばれる鉱石はこういった特殊な環境——つまり火山でしか精製される事はなく、それを求める為にはどうしても火山を散策するしかなかった。

「失敗したなあ……。せめてジンさんに来てもらえば良かった」

口に出して見るが、それは夢物語に過ぎない。“彼女”はジン・ジュルグが村長の命により他のハンター達と樹海の調査に出掛けている事を知っていた。しかしそれでも、このラティオ火山の広さを考えると、たった一人で散策するのは辛いと思い始めていた。

ジンの次に思い浮かんだ顔は、“彼女”にとって命の恩人である<ギザミシリーズ>を身に纏った男の顔だ。同じ村に住んでいる事は知っているが、半年程前に一度出会ったきり出会う事はなかった。理由は明白、“彼女”自身が色々なクエストを受注していた為、村にいる事が少なかったからだ。助けられた一件以来、“彼女”は“彼”を尊敬し、“彼”のようなハンターになる為に努力を重ね続けている。

しかし今回、新しい武具を作った為にお金がなくなった“彼女”は、紅蓮石を取ってくれば高く買い取ってくれるという村人の話に乗り、それだけの為にこの火山に来ていた。

更に地図を見ながら歩き続け、暫くしたその時だった。火山の最

深部に繋がる最後の広いエリアに出た“彼女”は、後は地図通り、正面にある坂を登れば目的地に辿り着ける。しかし、“彼女”の目に真っ先に映ったのは坂ではなく、地面に突っ伏している二つの人影だった。それらがハンターである事は、独特な形の装備から明らかだった。

“彼女”の脳裏に、火山に発つ前の村長の言葉が過ぎる。

『昨日、おぬしと同様にラティオ火山へと発った者達がある。出会う事があれば、協力するのじゃぞ』

まさか、昨日の――。

“彼女”はすぐに倒れている二人のハンターに駆け寄った。<ザザミシリーズ>を身に纏った美男子と言える顔立ちの少年と、<フルフルDシリーズ>を身に纏った、少年に劣らず綺麗な顔立ちの女性。まず少年の首に手を当て、脈があるか否か確認する。しかし、残念ながら既に事切れていた。“彼女”の胸がチクン、と棘が刺さったかのように痛む。そして慌ててもう一人の女性の首に手を当てる。

脈が、ある――“彼女”は少し安堵するが、それでも女性が危険な状態である事は明らかだった。顔が真っ青に変色し、呼吸をしているかどうかも分からない程の、真正正銘の虫の息だったのだ。

このままでは火山の熱にやられてしまうと判断した“彼女”は、倒れている女性の手を自分の首に回して女性の身体を支えながら立ち上がる。その瞬間、女性がガンナーである事を察する事が出来た。思いの外、防具が軽かったのだ。剣士用とガンナー用の防具では、動きやすさを重視するガンナー用の方が圧倒的に軽く出来ている。傍にライトボウガンが落ちている事も確認出来た。

火山の外に出たら助けを呼ぼう。お願いだから、モンスターに遭遇しませんように――。

そう祈りながら、“彼女”――ミアン・ジュルグはふらふらとしながら、それでもしつかりとした一步を踏み出した。

戦う者達 〱 樹海に潜む死神 〱
第三話 「素人の彼女と玄人の彼」

昨夜に降り注いだ雪は真昼間になっても溶ける気配はなく、何人もの村人が家の屋根に登って雪掻きをしている。そんな光景を見る限りはポツケ村も平和なのだが、フラヒヤ山脈に近いこの村がいつ

フラヒヤ山脈を主に巢としているティガレックスやドドブランゴと言ったモンスターに襲撃されるか分からない状況にある以上、ハンターは貴重な存在だった。

ミアンもそんなポツケ村に住んでいるハンターだが、ハンターの資格を取得してからまだ2年も経過しておらず、何も考えていないような考えと行動から周りからは度々“素人”と呼ばれる事がある。

しかし彼女は“彼”のような玄人になるべく日々努力を続け、一端のハンター程度にはなれたと思っていた。それは、自惚れに過ぎない事に彼女は未だ気付いていない。

ミアンがラティオ火山から怪我人を連れて帰って来た時、ポツケ村は異常に静かだった。確かに雪掻きをしている人間はいるのだが、道行く人間にハンターの姿がなかったのだ。こんな時はいつも決まっている。ハンターの葬儀があるのだ。

彼女の脳裏に樹海の調査に行ったジンの顔が過ぎり、冷や汗が頬を伝う。彼女は通りがかった村人に怪我人を診療所もある村長の家に運ぶよう依頼すると、自分は逸早く村長の家へと駆け出した。

「——村長！」

家の扉をバタンと開き、入るなりミアンは叫んだ。途端、三つの冷やかな視線が自分に集中し、彼女はすぐに『ごめんなさい』と呟く。

「ミアン……戻ったのか」

「ジンさん！ 無事だったんですね！ それと——」

「……久しぶりだな、ミアン」

「あ——」

村長の家にいたのは村長の他に、ジンⅡ、ジュルグとアルトアⅡ

ゼンリイの姿があった。そしてアルトアこそ、ミアンの命の恩人であり、尊敬する人物だった。冷たいようでそれでいて温かい目――半年前と何も変わっていない。

だが今は、久しぶりの再会に歓喜している状況ではなかった。ミアンも、そしてアルトアも。

「先生に女の人を診てもらいたいです！ 火山で倒れていた女の人で……とても危険な状態なんです！ 馬車の中で回復薬を飲ませ続けてはいたんですが……」

「む……一人だけ、か？」

村長が低く呟いた途端、後ろから一人の男性がその女性を抱えて家に入ってきた。ぐったりとした女性は、火山で見つけた時と顔色は変わらない。その女性を見たジンが、慌てたように叫ぶ。

「ゼツイ！？ そんな、お前――」

「話は後じゃ。急いで彼女を奥へ運んでやってくれぬか」

村長が言うや否や、男性がゼツイと呼ばれた女性を慌てたように家の奥へと運んでいく。奥には簡易だがベッドがいくつか置いてあり、小さな診療所として役目を果たしている。村唯一の医者は獣人族のアイル―だが、その腕は確かなものだった。

「……悲報ばかりじゃな。まったく、この村は今死神にとり付けられておるのじゃろうか」

「どういう事だ？」

村長の独り言を聞いたアルトアが口を開く。その意味が分からなかった彼に、代わりにジンが答える。

「ゼツイは弟分と妹分の三人で常に行動していた……。そして、今回は彼女しか帰って来なかった」

「……男の人は……私が見つけた時にはもう……もう一人の女の人 は分かりませんが……」

「状況から判断すると、恐らく生きてはいないだろうな」

ここまで続け様にハンターが何人も亡くなる事はポツケ村では初めての事だった。昨日今日で現在、5人のハンターが死亡している事になる。元々ドンドルマをはじめとした大きな街であれば代わりが効くのだろうが、ポツケ村のような小さな村は元々ハンターが少ない為、人手不足に苛まれる事になる。だが、街からどんなハンターが派遣されて来ようが、死んだハンターの代わりは務まっても死んだ人間の代わりにはならない事は明らかだった。

「……“あやつ”は医者任せ、アルモ、メイス、ガイの葬儀を始めようかの。村の外れに、もう皆集まっている頃じやろうて」

「そうだな……ミアン、帰ったばかりで悪いがお前も参加してくれ」

突然の事で少し驚いた表情を見せた彼女だが、すぐに首を縦に大きく振った。

村長、ジン、そしてミアンが村の外れへ向かうべく歩き出したが、アルトアは一步も動かなかった。ミアンが扉を開ける頃には、彼は彼らとは逆の方向へ——家の奥の方へと歩き出す。それに気付いたジンとミアンは立ち止まり、口を開く。

「おいアルトア、何してる」

「そうですよ、早く行きましょう」

一つ大きな嘆息を吐いてから、アルトアは答えた。

「俺は……儀式的なモノが苦手だ。それに俺にはやるべき事がある」
「そんな自分勝手に許されるか！」
「勝手なのは分かってる。だが、許して欲しい」

ジンとミアンの耳には、アルトアの言葉は冷たいものでしかなかっただろう。彼自身も死んだハンター達とは何度も共にクエストを受注した仲であり、共に笑い、戦い、盃を交わした仲なのだ。ジンは彼の言葉が信じられなかったが、彼と付き合いの長いジンは、どこか言葉の裏の何かを感じ取っていた。それは、“怒り”という感情。戦友を亡き者にされた怒りだ。

こうなった以上は、アルトアの耳には誰の言葉も届く事はない。己の信ずる事に向かって行動する彼を止められるモノはそうはない。

「……っ、勝手にしろっ!!」

「……先に行っています。待ってますね」

アルトアはミアンの声に手だけ振って答えた。途端、ボタンという音とともに家の扉が閉まり、家の中にはアルトアだけが残った。

「……生者が死者に出来る事は、死者の事を忘れない事——そして、仇を討つ事だけだ」

彼はゆっくりと奥へ進む。ギシッギシッと床が音を立て、そしてやがて彼の目の前に扉が二つ現れる。片方は診療所、そしてもう片方は――。

アルトアはもう片方の方の扉に手を掛け、開いた。独特な臭いが彼の鼻腔を衝く。その部屋の一面に広がっていたのは、見渡す限りの本、本、本——世界中のありとあらゆる種類の本が棚にびっしりと収められていた。伝説、伝承、モンスターの生態、ポケケ村の歴史などあらゆるジャンルの本がある。

「——待つてたよ」

すぐ足元から声がして視線を下に向けると、そこにはくハイメタシリーズ>に身を包んだままのロジャーが一冊の本を抱えて立っていた。村に帰ってまで防具を身に付けているのは自分の“正体”がバレない為だろうが、周囲から見れば明らかに怪しかった。アルトアはそれに触れる事もせず口を開く。

「村に帰ってから姿が見えないと思ったら……何故ここに？」

「その、アルトアさん達の友人を殺したモンスターに興味があつてね……。それを調べていたんだけど、やっぱりなんだ」
「やっぱり、とは？」

ロジャーは一呼吸置いてから呟いた。

「教えてあげるよ、“死神”の正体を——……」

T o b e n e x t …

第四話 「凶悪な悪あがき」

「メイス、ガイ、アルモ。この者達に永久の安らぎが訪れん事を……」

規則的に並んでいる三つの棺桶を中心に、ポツケ村のハンターを含めた多くの人間達が集まっている。屋外の小さな小さな葬儀場は村長のその一言を最後に静まり返り、ただ誰かがすすり泣く声が聞こえるだけだった。数少ないハンターが亡くなる事は小さなポツケ村にとって相当な痛手だった。しかしそれ以上に、ハンターの命を一度に三つも奪う“脅威”が存在しているという現実には、誰もが恐怖していた。

“脅威”——新たなモンスター。その姿を垣間見たハンター、ジン・ジュルグからの情報は極めて少ないものであり、対策を立てるには不十分だった。ポツケ村の村長も、そのモンスターに対する知識は極僅かなものだった。未開発の地域で発見されたモンスターは確認されていない新種のモンスターである可能性が高く、既に村長がドンドルマの街へ使いを送り、情報がないか問い合わせている。

やがて村長の合図で棺桶に火が灯される。可燃性の液体を予めかけられていた棺桶の火は見る見るうちに大きくなり、やがて巨大な炎となって棺桶を焼き尽くす。中の遺体は見るも無残なもので、腸を乱雑に食われていたり、四肢が噛み千切られていたりしていた。唯一綺麗なアルモの遺体も、綺麗なのは見た目だけで中は骨が複雑

に折れてあらゆる内臓に突き刺さっている。

今回、三人の遺体を回収できたことでさえ、ジンにとっては奇跡に感じていた。

彼はただ、燃え上がっていく炎を呆然と見つめていた。ハンターの死に遭遇した事は数あれど、それに慣れる事は決してない。ましてや度々チームを組んでいた仲間である以上、死んでしまったとは信じられなかった。

強く唇を噛む。血が吹き出て、垂れた赤い糸がポタリと地面の雪を赤く濡らす。彼らが亡くなった事は彼の責任ではない。しかし、何も出来なかった自分に腸が煮えくり返るような怒りが込み上がる。チクチクと痛む胸も、彼にとっては鬱陶しいものでしかなかった。

「仇は、討つ」

ジンはぼそりと、隣のミアン＝ジュルグにも聞こえないように呟いた。

やがて棺桶の炎が鎮火されかけた頃、村長がジンに向かって呟く。

「ジン……気持ちには分かるが、そのナルガクルガの討伐は他の者に任せておくがいい」

「……冷静な行動が出来ないって言うんだろ？ そいつは違う、今の俺は今まで生きてきた中で一番冷静だ」

「ほう？ ならこれからどうするのじゃ？」

「決まってる。樹海へ向かう」

村長があからさまに溜息を吐き、首を横へ振った。

「頭を冷やすのじゃ、ジン。おぬし一人で何ができる？ アルトアはまだ本調子ではないのじゃぞ？」

「それでも奴の動きを見た俺なら、一人でも戦える」

「——ジンさんには私がついてるよ！」

ジンの隣にいたミアンが彼と村長に割って入るような形で叫ぶが、それは彼らを呆れさせる事に他ならない。ミアンの腕はジンも村長も良く知っている。多少の弓の腕があつたとしても、彼女には経験が足りなさ過ぎる。咄嗟の判断を迫られた時、迷う暇を敵は与えてはくれないのだ。そして今度の敵はその最たるものだ。

「止めたって無駄だぜ。俺は戦う。たとえ一人でもな」

「阿呆が、無駄死をすると目に見えている」

「私を無視するなあゝっ！」

とミアンが眉間に皺を寄せて叫んだ直後だった。ドオンという轟音と地響きと共に、鎮火しかけていた棺桶だった炭の塊の上に、何か巨大なものが落ちてきたのだ。姿は舞い上がった雪と炭で見る事は出来ない。

その何から発せられる気配を、ジンは知っていた。彼は背の弓に手を伸ばし、構える。他の何人かのハンターもその気配に気付いたが、生憎武具を持ち合わせておらず、ただ後ずさりするだけだった。ハンターの葬儀にまで武具を装着しているのは、クエストから戻ったばかりのハンター——つまりこの場には、ジンとミアンだけだった。

「な、何！？」

ミアンが慌てたように叫ぶ。その答えは、風が導いた。

風に吹かれて雪と炭が流されていくと、その巨体は姿を現す。

それは、頭から血を流し、尻尾をなくしたティガレックスだった。

戦う者達　　く樹海に潜む死神く

第四話　「凶悪な悪あがき」

「そのモンスターの名前はナルガクルガ。その速さから迅雷と呼ばれてる。オイラが昔住んでたシキにも棲息していたモンスターさ。とても厄介なモンスターで、シキでも迂闊に遭遇すると命はないって言われてた。行動パターンや姿かたちが似ている事から、ティガレックスと同類じゃないかって言われてるけど、実際は分からない。……もしかしたらティガレックスの遺伝子から人工的に作られたモンスターかもね」

「そんなくだらない推測はいいから、続ける」

「くだらないとは失礼だね、まあいいけど。ナルガクルガはあのジンってハンターが言ってた通り、凄く速い。ティガレックスとは比べ物にならないくらいさ。オイラの——いや知り合いのハンターも四人がかりで何とか倒せたって言ってた」

「お前は戦った事はないのか？」

「シキにいた頃は本当に子供だったからね、刀も満足に扱えなかったくらいだったし。でも、シキでも最初は相当な被害を被ったそうだよ。腕の立つハンターが何人も殺されたくらいなんだ。怒ると目が真っ赤に光って、尻尾の棘が鋭く立つんだって。怒ってしまったらもう手もつけられなくて、戦うよりは逃げる方が懸命って話さ。怒っていない時より、動きが速くなるらしいんだ」

早い話が、とんでもない化け物モンスターか——アルトアはそう思った。それほど速さを持ち、それでいて攻撃力も高いモンスター。少なくとも通常の装備で挑むのは自殺行為に等しいかも知れない。

村長の家——アルトアとロジャーはアルモ達の葬儀には参列せず、この場で謎のモンスターについて話し合っていた。腕組みし、胡坐を掻いて座っているアルトアに対し、ロジャーは本棚の上に腰掛けている。身に防具を纏っているため重く、ロジャーが少し動く度に本棚がギシギシと悲鳴を上げていた。

「だがそれでも、奴を倒さない事には死んだあいつらが救われない。あいつらが出来なかった事は、俺が代わりに成し遂げる」

「……本当にハンターとして優秀なんだね、アルトアさんは。普通、そこは『仇を討つ』って言うところだと思っただけど、そういうた事じゃないんだ」

「モンスターに恨みを持つては足元をすくわれる。俺はただ、あいつらの代わりにクエストをこなすだけだ」

アルトアは立ち上がり、くるとロジャーに背を向ける。

「そしてその障害となる奴を……倒してみせる」

「オイラも協力するよ。オイラの秘密を知られた以上、口止め料くらは払わないと」

「……お前の正体など、少し注意して見れば誰でも分かる」

「むっ、オイラの変装は完璧な筈だニヤ！ 絶対にバレないニヤ！」

「興奮すると正体を現すクセがあるようだな……。それとも既にバレている俺の前だから油断しているのか？」

ロジャーはハッとして手で口元を押さえるが時既に遅し。もっとも、兜越しに手を当てたところで意味はない。

「……誘導尋問とはやってくれるね」

「そんなつもりはなかった——……っ！ ……聞こえたか？」

「オイラの耳の良さをナメてもらっちゃ困るね。葬儀場の方からだ」

突如二人の耳に聞こえたのは、何か巨大な物体が地面に激突したような轟音と、人間の悲鳴。何が起こったか詳細は不明だが、二人にはあらかた見当が付いていた。

ロジャーがピョンと本棚から飛び降りる。同時にその衝撃で本棚がバキッと音を立てて壊れ、几帳面に整理整頓されていた多数の本が床に散乱した。何か言いたそうなアルトアの目を尻目に、ロジャーは家の出口へと急ぐ。彼の想像が正しければ、本棚を修理し本を整理している暇などなかったからだ。

アルトアはロジャーを追いかけてながら失笑する。

「戻ったらちゃんと片付けるん——」

「うるっさい、分かってるニヤ！」

×××

突如葬儀場に現れたティガレックスは既に瀕死の状態である事は明白だったが、それ故に安易に近づく事さえ許されない。逆鱗に触れたモンスターは鬼と化す。自らの死を恐れず自らの身を傷付けた人間を道連れにせんとするいわば背水の陣——人間にとつてこれほど恐ろしい状況はない。その場にいた多くの人間はただ、凍りついたように身を強張らせるだけだった。

「何をボーッと突っ立ってる！ さつさと村に戻り、ハンターは武器を装備して来い！」

状況を見かねたジンが麻痺毒の付いた矢をティガレックスに向けて放ちながら叫ぶ。今の状況が最悪だという事は彼も分かっていた。非武装の人間が多く、武装している人間は二人とも遠距離攻撃を主とするガンナーだ。剣士であればティガレックスの正面から立ち向かう事も可能だが、剣士がいない以上、ティガレックスが非武装の人間に攻撃を仕掛ければそれを守る事は不可能に等しい。如何に自分にティガレックスの注意を惹かせる事が出来るか、それが村人への被害を食い止める事になる。

ジンの弓から放たれた数本の矢は真っ直ぐにティガレックスの右

腕に突き刺さるものの、麻痺毒で身体を硬直させるには時間と毒の量が足りなさ過ぎた。ティガレックスの痛感神経は途切れているのだろうか、もしくは精神が肉体を陵駕しているのだろうか——ジンの攻撃に何のリアクションも見せず、左腕で地面を抉り上げる。抉られた地面は大きな塊となって一直線に逃げまとう村人へと飛んでいく。今から追いかけたところで追いつく事など出来やしない。畜生と憤りながらもジンはその塊が飛んでいく様を睨み付ける。

だがその進行方向上に、ミアンの姿があつた。弓は背中にセットされたままだ。

馬鹿野郎、一体何を考えて——。

ジンはそう思ったが、彼女の右手に握られている物を見てその考えが分かった。彼女がティガレックスの攻撃を先読みしたのか、それともただの偶然なのか——どちらなのか彼には分からなかったが、分かるのはただ、その地面の塊が粉々に砕け散る事だけだった。

ミアンはスツと手に持っていた小さな樽——“小タル爆弾”を迫り来る塊に向けて放り投げると、すぐさま横へ前転した。途端、塊が爆弾に衝突した衝撃で轟音とともに爆弾が炸裂する。閃光玉ほどではないが眩い光が辺りを包み込む。砕けた塊がバラバラとミアンの身体に降り注ぐ頃に、ジンもまた行動を始めていた。

爆弾が炸裂する寸前、ティガレックスはジンの方へと突進しようとしていた。正面に向き合って対峙する際、ガンナーにとってはピンチでありチャンスでもあるのだ。どんな生物でも弱点である頭部を狙う事が容易になるからだ。

再び麻痺毒矢を乱射するジンだが、相手の突進を回避するタイミングを見失わないように見計らい、ある程度の距離のところで弓を背中に収めた。手に矢を一本握り締めたままだ。

やがてティガレックスがその大口を開けて彼の眼前まで到達する。顔を覗かせる大きく鋭い牙は近くで見るとより恐怖を感じる。ジンはその瞬間に地面を強く蹴り、跳んだ。重たい鎧を身に着けている以上そう高くは跳べないが、それでも彼は鎧を装備していない人間以上に舞い上がった。同時に身体を捻って空中で横向きになると、手に握り締めた矢を更に強く握り締め、そして――。

ティガレックスは突如視界から消えたハンターが何処に消えたのか、背中の衝撃で初めて分かった。跳躍したハンターは自分の背中を転がりながら手に持っていた矢を突き立てたのだ。

「グオオオオオツ!!!」

地面に着地したジンはティガレックスの咆哮を聞きながら、矢が突き刺さっている箇所を見てチツと舌打ちする。

頭に突き刺すつもりだったがしくじった。やはり奴の動きは速い――彼は再び弓を手に取りながら辺りを見回した。村人の避難はほぼ完了している。

後は時間との勝負だった。アルトアと共に長年ハンターをやってきた彼だからこそ分かる。ティガレックスは己の死に際に悪あがきをしているだけで、死期はもう間近まで迫っている。それまで耐え凌ぐ事が出来れば良いが、激昂状態のティガレックス相手にたった一人では心許ない。早く村から他のハンターが来てくれれば――そう思った時だった。

「ジンさん！」

と声を上げながらミアンが駆け寄って来た。それを見て彼は溜息と同時に憤りを覚える。

「馬鹿野郎！ 何故逃げない！」

「私だってハンターだよ！ 戦える！」

「だが——」

『ティガレックスと戦った事のないお前じゃ足手まといだ』と言うおうとしたジンだったが、ティガレックスの行動を見てその先を言う事はなかった。向き直ったティガレックスは村の方を向いていた。そして再び、村へ向かって走り出したのだ。

ジンは舌打ちし、彼のすぐ傍にいたミアンを振り払うように弓を構えるとそのままティガレックス目掛けて矢を放つ。だがティガレックスのスピードは速く、その場から矢を放ったのでは突き刺さる事さえ出来ない。

「あいつ、村へ——」

「死んでも止めるぞっ！！」

ジンとミアンが同時にティガレックスを追うべく走り出すが、追いつける筈もなく、その距離はただ開いていくだけだった。葬儀場と村の距離は徒歩で数分程度、ティガレックスがそのスピードで進めば一分も経たずに村に到達してしまうだろう。それを止める術は、どう考えてもジンとミアンにはなかった。

ティガレックスを追って走り続けると、やがて村の建物が見えてくる。それと同時に、ティガレックスの進行を遮るかのように、二つの人影が立っていた。大きな影と極端に小さな影——ジンはすぐに、それが誰であるか悟った。

「——悪あがきも、ここまでだ」

「自分の尻は自分で拭かないとね」

大きな影——アルトアが双剣を構え、極端に小さな影——ロジャーが腰の太刀の柄に手を伸ばす。ティガレックスとの距離がどんどん詰まり、彼らが一步前に足を踏み出そうとしたその時だ。

「——何をやっておる！ 二人とも下がっておれ！！」

二人の後ろから突如しゃがれた声がして、振り返るとそこには鋭い目つきをした村長が立っていた。

「村長こそ下がっ——」

「下がらないと怪我するぞ！！ 早くせんかつ！！」

初めて見る村長のその切羽詰った表情とその声は迫力があり、アルトアとロジャーは従わざるを得なかった。武器を構えたまま、じりじりと後ろに下がっていく。村長にどんな思惑があるかは分からないが、何かが起こった時の為の準備と覚悟を彼らは忘れない。

やがてティガレックスが村の入り口まで数秒のところまで到達した——その時だ。

突然、ティガレックスの姿が消え、同時に耳の鼓膜が破れそうになる程のやや曇った轟音が響き渡った。待ち構えていたアルトア達と追いかけて来たジン達は突如発生した黒い煙と突風に苛まれ、まるで地震が発生したように地面が揺れる中、倒れないよう地面を強く踏み締めながら腕で顔を覆う。

風が吹き、煙が晴れていく。地面の揺れもその頃には収まっていた。アルトア達とジン達の丁度中央付近に開いた大穴は、地面から少し顔を覗かせている網からそれが“落とし穴”であつた事が分かる。

“落とし穴”の中のティガレックスは既に絶命していた。恐らく

“落とし穴”の中に“小タル爆弾”のような物を罠として設置し、ティガレックスの重みでそれが炸裂したのだろ。小さいながらも数あればそれでも十分な威力を発揮する。

よくよく考えれば、村がモンスターに襲われないように村の出入り口を中心に罠が張ってあるのは当然だな——アルトアはフツと笑う。

「む」

ふとロジャーを見たアルトアは思わず声を出す。

「んん？」

「ええええええーっ!？」

「……ロジャー、おぬし——……」

つられたようにジン、ミアン、村長がロジャーの姿を見て口を開く。

「み、見ないで！ お願いだから見ないでっ!!」

ロジャーが身に着けていたフルフェイスマスクは不運にも恐らく爆風によって飛ばされてしまったのだろ。必死に顔を手で隠そうとするも、その小さな手では頭の耳まで隠す事は出来ない。

ロジャーの素顔を見たアルトア以外の人間は、ただ驚くばかりだった。

「次からはもつと兜をしっかり被る事だ」

小さく、アルトアは口の中で呟いた。

T o b e n e x t . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7496m/>

戦う者達 ～樹海に潜む死神～ from モンスターハンター

2011年10月7日15時18分発行